『比較論理学研究』第5号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2007)

Vākyapadīya『〈時間〉詳解』章の研究 (2)
—*VP*3.9.16–26を中心に—

李　宰炯(イ　ジェヒョン)

0. はじめに

本稿は、パーニニ文法学派を代表する文法学者・言語哲学者の一人であるバルトリハリ(Bhartṛhari, 450-500年頃)の主著、*Vākyapadīya*の『〈時間〉詳解』章(Kālasamuddeśa)第16詩節から第26詩節(*VP*3.9.16–26)までの11詩節及びそれらに対するヘーラーラージャ(Helārāja, 10世紀頃)による注釈*Prakīrṇaprakāśa*の翻訳研究である。周知のように、バルトリハリは〈時間〉を語ブラフマンが有する自立性(svātantrya)能力と定義する。その上で、彼は『〈時間〉詳解』章において〈時間〉と我々の言語活動の場としての現象世界における様々な事象との関係を多様な視点から詳細に検討している。

本稿の翻訳研究の対象である*VP*3.9.16–26は、バルトリハリが〈時間〉を機会因(nimittakāraṇa)として起こる事象の生起から消滅までの過程をヴァイシェーシカ(Vaiśeṣika)学派の学説を援用しながら説明している箇所である。バルトリハリは同学派の存在論の根幹をなす六範疇(padārtha)論を自身の能力(śakti)論に基づいて再構築した上で、現象世界における様々な事象の生起・存立・消滅は能力の扶助(upakāra)による結果として説明している。そのような意味で、*VP*3.9.16-26は現象世界における生滅変化を説明するヴァイシェーシカ学派の学説に対するバルトリハリの理解が窺える箇所と言えよう。

方法論として、本稿ではまず*VP*3.9.16–26の詩節だけの翻訳を提示する。それは、註釈者ヘーラーラージャがどのように*VP*3.9.16–26を解釈したのかではなく、*VP*3.9.16–26においてバルトリハリがどのような思弁の展開を見せたのかを直截に提示したかったからである。そして次に*VP*3.9.16-26の内容の詳しい検討に入る。内容の検討においては、まずバルトリハリが自身の能力論に基づいてどのようにヴァイシェーシカ学派の六範疇を理解していたのかについて述べる。その理由は上述したように、能力概念に基づく六範疇の再解釈がこの*VP*3.9.16-26の内容展開の背景になっているからである。当該詩節の内容分析がそれに続く。最後にヘーラーラージャによる註釈の翻訳研究を原文とともに提示する。底本とするIyer本が完成度の高い刊本であることは疑い得ない。しかしながら、数多くの誤植が見出されるなど改訂の余地があると思われる。

翻訳するにあたっては、まず*VP*の定本としてRauを使用し、必要に応じてBenares, Trivandrum, Iyer, Raghunāthaの諸刊本を参照した。そして、*Prakāśa*に関してはIyerを定本とし、上記のBenaresなどの諸刊本を参照することにした。なお、筆者はバルトリハリ研究の世界的権威者の一人であるAshok Aklujkar教授の御厚意により教授が収集した*VP*第三巻と*Prakāśa*の諸写本を入手しており、*VP*のテキスト、*Prakāśa*のテキストに関しては、二つの写本を随時参照することができた。Aklujkar教授にはこの場を借りて感謝の意を表したい[1]。

[1] Aklujkar教授の指摘によれば、この二つの写本はWilhelm Rauによる写本リスト(Rau[1971])におけるF[4]

1. *VP*3.9.16–26

それでは、まず *VP*3.9.16–26 の翻訳を原文とともに以下に提示する。

1. *VP*3.9.16–17: 個物の生起

1.1. *VP*3.9.16: 〈種〉による諸原因の使役と恒常な〈行為〉の顕現

viśiṣṭakālasaṃbandhāl labdhapākāsu śaktiṣu /
kriyābhivyajyate nityā prayogākhyena karmaṇā //

特定の〈時間〉と関係を結ぶことによって［諸原因の］能力が成熟するとき、「〈使役〉」と呼ばれる〈行為〉を通じて、［諸原因の中に］恒常な〈行為〉が現われる。

1.2. *VP*3.9.17: 個物の生起と原因の能力による個物の制限

jātiprayuktā tasyāṃ tu phalavyaktiḥ prajāyate[2] /
kuto 'py adbhutayā vṛttyā śaktibhiḥ sā niyamyate //

そして、その［恒常な〈行為〉が顕現する］とき、結果である個物が〈種〉に使役されて生じる。その［結果である個物］は、何らかの理由から、驚くべき作用を通じて［原因が有する］能力によって制限される。

2. *VP*3.9.18-20: 内属能力の扶助による個物・〈種〉の顕現、属性の生起

2.1. *VP*3.9.18: 内属能力の扶助と個物の顕現

tatas tu samavāyākhyā śaktir bhedasya bādhikā /
ekatvam iva tā vyaktīr āpādayati kāraṇaiḥ //

そしてその後、［原因と結果の］違い［が顕われること］を阻む「内属」と呼ばれる能力によってその［結果である］個物はあたかも諸原因と同一なものになるかのようである。

2.2. *VP*3.9.19: 個物の〈種〉の顕現

athāsmān niyamād ūrdhvaṃ jātayo yāḥ prayojikāḥ /
tāḥ sarvā vyaktim āyānti svacche chāyā ivāmbhasi //

そして、この［原因の能力による結果の］制限の後、［諸原因の］使役者であるすべての〈種〉は［例えば木などの］映像が澄んだ水に［水と異ならないものとして映る］ように、［個物の中にあたかも個物と同一なものであるかのように］顕現する。

2.3. *VP*3.9.20: 属性の生起と属性の〈種〉の顕現

kāraṇānuvidhāyitvād atha kāraṇapūrvakāḥ /
guṇās tatropajāyante svajātivyaktihetavaḥ //

［結果は］原因に随順するものであるから、［生起の順序において］原因［である個物］に先行される属性はその後［すなわち個物が生じた後］、その［自身の内属因である個物］の中に生じる。［生起した］属性は自己の〈種〉の顕現の原因となる。

3. *VP*3.9.21-23: 個物の存立と〈行為〉実現

3.1. *VP*3.9.21-22: 基体・依拠するものの恒常性による個物の存立

āśrayāṇāṃ ca nityatvam āśritānāṃ ca nityatā /
tā vyaktīr anugṛhṇāti sthitis tena prakalpate //

［個物それ自身の］基体の恒常性と［その個物に］依拠するものの恒常性がそれら［結果である］個物［が存立すること］を扶助する。そのことによって、［結果である個物の］存立は可能となる。

anityasya yathotpāde pāratantryaṃ tathā sthitau /
vināśāyaiva tat sṛṣṭam asvādhīnasthitiṃ viduḥ //

恒常ではない［事象］は、［それ自身の］生起に関して他者に依存する。それと同様に、［恒常ではない事象は］存立に関しても他者に依存する。［もし他者に依存しないとすれば、］それはただ消滅するために創造された［ことになるであろう］。［ゆえに、］人々は［恒常ではない事象は］他者に依存して存立すると考える。

3.2. *VP*3.9.23: 他者の扶助に基づく個物の〈行為〉実現

と F[20] にそれぞれ当該し、特に後者は Iyer 刊本における [E²] に同定されるものである。

[2]Rau, Benares: prajāyate; Iyer, Raghunātha: pratīyate; Trivandrum, Rau[s]: pratāyate.

sthitaḥ saṃsargibhir bhāvaiḥ svakriyāsv[3] anugṛhyate /
naiṣāṃ sattām anudgṛhya vṛttir janmavatāṃ smṛtā //

存立している［事象］は、自分の〈行為〉に関して［自身が］関係を結んでいる［他の］事象によって扶助される。伝承によると、これら［存立している事象が関係を結んでいる他の事象］の存在を認めなくては、生起を有する［事象］に関して働きは成立しない。

4. *VP*3.9.24-25: 老衰能力と個物の消滅

4.1. *VP*3.9.24: 老衰能力と個物の能力の抑制

jarākhyā kālaśaktir yā śaktyantaravirodhinī /
sā śaktīḥ[4] pratibadhnāti jāyante ca virodhinaḥ //

［〈時間〉が有する］他の能力［すなわち事象の生起と存立を実現せしめる能力］と矛盾する（virodhin）「老衰」と呼ばれる〈時間〉の能力は、［事象が持つ］諸能力を抑制する。［それによって、〈時間〉が有する他の能力によって実現される結果とは］矛盾する（virodhin）［結果］が［事象に］生じる。

4.2. *VP*3.9.25: 扶助者がなくなることによる個物の消滅

prayojakās tu ye bhāvāḥ sthitibhāgasya hetavaḥ /
tirobhavanti te sarve yata ātmā prahīyate //

しかし、［関係を結んでいる事象の］使役者であり、［その事象の］存立という部分の原因である事象すべてはなくなる。その結果、［それらと関係を結んでいた事象の］本質は失われる。

5. *VP*3.9.26: 驚くべき作用による現象としての生起・消滅

yathaivādbhutayā vṛttyā niṣkramaṃ nirnibandhanam /
apadaṃ jāyate sarvaṃ tathāsyātmā prahīyate //

順序を持たず、［生起するための］根拠も持たない、［そしてそこに原因が］地歩を占める余地のない[5]一切［の事象］は、驚くべき作用を通じて生じる。それと同様に、この［一切の事象］の本質は驚くべき作用を通じて失われる。

2. *VP*3.9.16–26 内容の検討

2.1. ヴァイシェーシカ学説の再解釈: 六範疇と能力

以下では上述したように *VP*3.9.16–26 の内容展開の背景となっているバルトリハリによるヴァイシェーシカ学説、特に六範疇論の能力論に基づく再解釈について述べる。この六範疇論の能力論に基づく再解釈という問題に関しては既に先行研究 Ogawa[1999] がある。従ってここでは主に同論文に依拠しながら、*VP*3.9.16-26 の内容を理解するために必要と思われることだけを簡単に整理して述べたい。

バルトリハリは *VP*3.7.1 において〈能成者〉(sādhana) を「能力それ自身の基体に内属している〈行為〉の実現に対する能力及び能力自身の基体とは別の基体に内属している〈行為〉の実現に対する能力（sāmarthya)」と定義している[6]。さらに、彼は *VP*3.7.12 においては「ある事象 x が別の事象 y を扶助するとき、x は y に対する〈能成者〉である」と述べる。つまり、彼の〈能成者〉定義によると、〈能成者〉は別の事象を扶助するものであり、能力である。小川 [2000:572, fn.47] によれば、ヘーラーラージャは〈能成者〉を能力に同定した上でバルトリハリの〈能成者〉の定義を次のように言い換えている。

Prakāśa ad *VP*3.7.12: paropakāri paratantraṃ sarvaṃ śaktilakṣaṇam anupatanti /

「他者を扶助し、［その］他者に依存するものは、すべて能力の定義に随順する」

[3]Rau, F[20](= Iyer[E^2]): svakriyāsu; Iyer, Benares, Trivandrum, Raghunātha, Rau[o]: sa kriyāsu; Iyer[M]: san kriyāsu.

[4]Rau, Benares: śaktīḥ; Iyer, Trivandrum, Raghunātha: śaktiṃ; Rau[A], Rau[s], Rau[m], Rau[M2], Rau[M11], F[20](= Iyer[E^2]), Iyer[M]: śaktiḥ.

[5]原語 'apada'。バルトリハリはこの語を *VP*3.3.76–80 において「そこに原因が地歩（pada）を占める余地のないもの」と「それを表現する言葉（pada）が存在しないもの」という二つの意味で使用している。当該文脈では、前者の意味で理解されるべきである。

[6]*VP*3.7.1: svāśraye samavetānāṃ tadvad evāśrayāntare / kriyāṇām abhiniṣpattau sāmarthyaṃ sādhanaṃ viduḥ //

この「能力の定義に随順するもの」には属性（guṇa）も含まれる。なぜならば、Ogawa[1999:1008-09] によれば、「他者 x と関係を結び」（saṃsargin）、「その x を他のものから区別し」（bedhaka）、「その x に依存する」（paratantra）という、属性が持つ特徴すべてを能力も有するからである。

〈能成者〉及び能力に対する以上のような理解に基づくとき、ヴァイシェーシカ学派が独立した事象として主張する六つの範疇すべては能力として再解釈され得る。まず、色（rūpa）などの属性はそれが内属する実体に対する〈知覚行為〉を扶助するから能力である[7]。同様に色性（rūpatva）などという特殊な普遍（sāmānyaviśeṣa）も、色に対する〈知覚行為〉を扶助するから能力であり[8]、色などの属性に対する認識は感官・対象・内官（manas）・〈行為主体〉（kartṛ）であるアートマンという四者の結合（saṃyoga）によって起こるという点で、結合も能力である[9]。また内属（samavāya）も、数や量、別異性（pṛthaktva）などに対する知覚を扶助するから能力である[10]。そして〈行為〉（karman）も、〈知覚行為〉（saṃdarśana）が〈欲求行為〉（prārthanā）に対して〈能成者〉となり、〈欲求行為〉が〈決定行為〉（vyavasāya）に対して〈能成者〉となるというように後続する〈行為〉に対して〈能成者〉となるから、能力である[11]。そして実体に関しては、色などの属性の内属因となってその属性に対する認識が起こることを扶助するから能力である。

バルトリハリはこのようにヴァイシェーシカ学派が主張する六つの範疇すべてを能力として再解釈しただけではない。彼はさらにその六つの範疇は能力である同時に能力保持者（śaktimat）でもあると述べる[12]。彼によると、例えば味（rasa）などの属性は味性（rasatva）などといった特殊な普遍を通じて味として限定的に把握されるから、この場合、味性などは能力であり、味などはその能力の保持者である。一方、味性などの特殊な普遍も味などの基体を通じて特定の基体に内属するものとして限定的に把握されるから、今度は味などが能力であり、味性などは能力保持者として理解される[13]。

以上のようにして、バルトリハリはヴァイシェーシカ学派が別々の独立した事象とみなす六つの範疇すべてを能力であり同時に能力保持者でもあるものとして再解釈している。彼によると、それら六つの範疇は常に扶助し、扶助されるものであるという点で能力であり、同時に能力保持者なのである。

2.2. *VP*3.9.16-17: 個物の生起

*VP*3.9.16-17 においてバルトリハリは個物の生起の過程を説明している。その説明によれば、(1) まず諸原因の能力が特定の〈時間〉と関係を結び、(2) そのことによって諸原因が有する能力が成熟し、(3) 次に能力が成熟した諸原因を実現されるであろう事象である個物の〈種〉が使役し、(4) 結果、諸原因の間に恒常な〈行為〉が顕われる。そしてその恒常な〈行為〉が諸原因の間に顕現するとき、結果である個物が生起する。生起した個物は何らかの理由で、驚くべき作用を通じて諸原因が有する能力に制限される。

バルトリハリは *VP*3.9.9 において〈時間〉を諸原因が有する「能力の使役の原因」（śaktīnāṃ prayogasya hetuḥ）と規定し、諸原因の能力は特定の〈時間〉と関係を結ぶことによって「活動を獲得する」（vṛttilābha）と述べている[14]。従ってバルトリハリのこの言葉に基づいて考えると、能力の「成熟」（pāka）とは諸原因が有する能力が特定の〈時間〉に活動を始めるようになることを意味する表現であろう。

[7]Ogawa[1999:1007]

[8]Ogawa[1999:1006-07]

[9]Ogawa[1999:1005-06]

[10]Ogawa[1999:1005-06]

[11]小川 [2000:551-52; 573-74, fn.51]。また、Ogawa [1999:1005] も参照されたい。

[12]Ogawa[1999:1006]

[13]小川 [2000:550]

[14]*VP*3.9.9: viśiṣṭakālasaṃbandhād vṛttilābhaḥ prakalpate / śaktīnāṃ saṃprayogasya hetutvenāvatiṣṭhate //（「特定の〈時間〉と関係を結ぶことを通じて、［原因が持つ］能力の活動の獲得は可能となる。その［〈時間〉］は能力の使役の原因として存立する」）

そして、彼は『〈種〉詳解』章 (Jātisamuddeśa) において〈種〉が自身の基体である個物の実現のために諸原因を使役し、また諸〈能成者〉(sādhana) の〈行為〉の使役者となると述べる。

*VP*3.1.25-27: na tad utpadyate kiṃcid yasya jātir na vidyate /
ātmābhivyaktaye jātiḥ kāraṇānāṃ prayojikā //

「〈種〉を有しないものはいかなるものであっても決して生起しない。自身の顕現のために、〈種〉は［自己の基体である個物を生み出す］諸原因の使役者となる」

kāraṇeṣu padaṃ kṛtvā nityānityeṣu jātayaḥ / kvacit kāryeṣv abhivyaktim upayānti punaḥ punaḥ //

「ある特定の［すなわち知覚可能な］結果の場合には、恒常な原因であろうと恒常ではない原因であろうと〈種〉は原因に地歩を得た上で、繰り返して顕現する」

nirvartyamānaṃ yat karma jātis tatrāpi sādhanam /
svāśrayasyābhiniṣpattyai sā kriyāyāḥ prayojikā //

「実現対象である〈目的〉に関しても、〈種〉は〈能成者〉である。その［〈種〉］は自身の基体の実現のために、［諸〈能成者〉の］〈行為〉の使役者となる」

〈種〉が「自己の基体の実現のために、諸〈能成者〉の〈行為〉の使役者となる」というバルトリハリの言葉は特に注目に値する。それはこの言葉が＜種＞による使役によって顕われる「恒常な〈行為〉」(nityā kriyā) とは何かという問題に関連するからである。バルトリハリは *VP*3.7.32-33 において〈行為〉が〈能成者〉に先行して存在するとみなす見解に言及した上で、その〈行為〉は初めにはいかなるものにも依拠しないが、後に特定の〈能成者〉に依拠するときには、自身が依拠する基体の諸能力を引き出すと述べる[15]。

さらに、『〈行為〉詳解』章 (Kriyāsamuddeśa) において彼はその〈行為〉について、滅することのない永遠なる働き (anapāyinī pravṛtti) であり、初めは一般者 (sāmānya) であるが、後に〈能成者〉の働きとしてあたかも実現されるべきものであるかのように確定されるものであると語る[16]。

〈能成者〉に先行して既に〈行為〉が存在することを認める論者の見解に基づくとき、〈種〉が自己の基体の実現のために引き起こす諸〈能成者〉の〈行為〉を我々は一般的で滅することのない永遠な〈行為〉が〈能成者〉の働きとしてあたかも実現されるべきものであるかのように具体化して顕われたものとして理解することができる。またそれは〈種〉の基体であるところの個物の実現のために、〈種〉によって使役された諸原因の活動に他ならない。バルトリハリは、その一般的で恒常な〈行為〉を人々はそれぞれの視点から、〈超越的なもの〉(apūrva)・〈時間能力〉・〈時間〉そのもの・〈行為〉と呼ぶと述べる[17]。彼が *VP*3.9.9 において〈時間〉を

[15] *VP*3.7.32–33: prāṅ nimittāntarodbhūtaṃ kriyāyāḥ kaiścid iṣyate / sādhanaṃ sahajaṃ kaiścit kriyānyaiḥ pūrvam iṣyate // pravṛttir eva prathamaṃ kvacid apy anapāśritā / śaktīr ekādhikaraṇe srotovad apakarṣati //（「あるものたちが認めるところでは、〈行為〉に先行して、［〈能力〉として］〈能成者〉は、［自己の基体の能産者］以外の〈根拠〉から生じている。またあるものたちの認めるところでは、それは［〈行為〉と］一緒に生じる。また別のあるものたちの認めるところでは、［〈能成者〉の存在に］先行してすでに〈行為〉が存在する。［この〈能成者〉に先在する〈行為〉は］まさに活動 (pravṛtti) と呼ばれるものである。それは、はじめは何ものにも依拠しないが、［のちに特定の〈能成者〉に依拠するとき、自己が依拠するその］同一の基体にある諸〈能力〉を、流れのごとくに、引き出す」）翻訳は小川 [2000:555-56] に従った。また、*VP*3.7.33c 句の 'śaktīr' は Rau, Iyer 共に 'śaktir' となっているが、Raghunātha の提案に従った小川 [2000:578, fn.64] の読みを採用することにした。

[16] *VP*3.8.37–38: kriyām anye tu manyante kvacid apy anapāśritām / sādhanaikārthakāritve pravṛttim anapāyinīm // sāmānyabhūtā sā pūrvaṃ bhāgaśaḥ pravibhajyate / tato vyāpārarūpeṇa sādhyeva vyavatiṣṭhate //（「ところで他の者達は、何ものにも依拠せず、滅することのない〈活動〉(pravṛtti) を、それが〈能成者〉とともに単一の結果をもたらすもの (ekārthakārin) であるとき、〈行為〉と考える。その［〈活動〉(pravṛtti)］は、初めは〈一般者〉(sāmānya) であり、後に［〈能成者〉の］〈ハタラキ〉として［〈料理行為〉〈切断行為〉といった特殊行為という］部分に分かたれ、［そして］あたかも実現さるべきものであるかのように確定される」）翻訳は小川 [2000:578, fn.65] に従った。

[17] *VP*3.7.34: apūrvaṃ kālaśaktiṃ vā kriyāṃ vā kālam eva vā / tam evaṃlakṣaṇaṃ bhāvaṃ kecid āhuḥ kathaṃcana //（「そのこのように特徴付けられるもの (bhāva)［である〈活動〉］を、それぞれの視点から (kathaṃcana)、あるものたちは〈超越的なもの〉(apūrva) そのもの、あるも

「諸原因が有する能力の使役の原因」と規定していることを考えると、我々はバルトリハリがこの『〈時間〉詳解』章においてはその一般的で恒常な本源的〈行為〉を〈時間〉能力或いは〈時間〉そのものとみなす視点を取っていたと判断することができる。彼は〈時間〉がそのような滅することのない永遠なる働きを有していることを、次のように述べている。

*VP*3.9.30: pratibandhābhyanujñābhyāṃ vṛttir yā tasya śāśvatī /
tayā vibhajyamāno 'sau bhajate kramarūpatām //

「その［〈時間〉］は抑制と認容によって知られるところの永遠の働きを有している。その［働き］によって区分されるとき、その［〈時間〉］は順序という相を享受する」

〈時間〉能力或いは〈時間〉そのものの一般的で恒常な働きが具体的な〈行為〉として諸原因の間に顕現するとき、結果である個物は生起する。そして生起した結果である個物は驚くべき作用（adbhutā vṛtti）を通じて、諸原因が有する能力にによって制限される。ヘーラーラージャは *VP*3.9.17 に対する注釈の中で結果である個物が「諸原因の能力によって制限される」ことは、「［結果である個物が］その［原因］にのみ定在する」（tatraiva tiṣṭhati）ことを意味すると説明している。結果である個物は、バルトリハリが *VP*3.9.26 において述べるように、生起する以前には「生起の根拠を持たず、そこに原因が地歩を占める余地のない」（nirnibandhanam apadaṃ）存在しないものである。

しかし、そうであるにもかかわらず、我々はある特定の原因があれば、以前には存在しなかった事象が生じることを日常生活の中で経験する[18]。そこに原因が地歩を占める余地のなかったところの事象がある特定の原因の存在を条件に生じ、さらにその特定の原因の中にのみ定在することは合理的に説明できない不思議なこと、驚くべき作用によることとしか言い様がないことである。

2.3. *VP*3.9.18-20: 内属能力の扶助による個物・〈種〉の顕現、属性の生起

*VP*3.9.16-17 で事象が生起する過程を述べたバルトリハリは続く *VP*3.9.18-20 において生起した個物とそれの〈種〉の顕現、そして個物の属性の生起、またその属性の〈種〉の顕現などがそれぞれどのような仕方でどのような過程を経て起こるのかを説明している。彼の説明によると、生起した直後、結果である個物は原因と結果の違いが顕われるのを阻む「内属」という能力によってあたかも原因と同一なものであるかのように顕現する。そしてその後、〈種〉も同じように内属能力によって自身の基体である個物と同一なものであるかのように顕現する。結果である個物を内属因とする属性はその個物が生じた後にその個物の中に生じる。それはまた属性それ自身の〈種〉の顕現をもたらす原因となる。

バルトリハリは個物がそれの原因と同一なものであるかのように顕われることから個物の属性の〈種〉がその属性と同一なものであるかのように顕現するまでの一連の過程すべてを因果関係によるものとして説明している。そして、その因果関係の核心に能力としての内属を置く。内属能力によって、生起した個物は自身の原因と同一なものであるかのように顕われ、個物の〈種〉は個物と同一なものであるかのように顕現する。また、個物の属性は個物を内属因として生じ、またその属性は自己の〈種〉の内属因となる。

のたちは〈時間能力〉（kālaśakti）そのもの、あるものたちは〈行為〉そのもの、はたまたあるものたちは〈時間〉そのものと呼ぶ」）訳は小川 [2000:556] に従った。

*VP*3.7.34 において言及されている〈超越的なるもの〉とは、小川 [2000:579, fn.66] によれば、ミーマーンサー学派の人々が言うヴェーダによって規定される普遍的なダルマである。諸〈能成者〉に先行して存在する〈行為〉、そして〈超越的なもの〉に関しては Ogawa[2000:343-368] に詳しい。

[18] *VP*3.3.78: apade 'rthe padanyāsaḥ kāraṇasya vidyate / atha ca prāgasadbhāvaḥ kāraṇe sati dṛśyate //（「そこに原因が地歩を占める余地のない事象に原因が地歩を占めることはない。しかし、原因があれば、以前には存在性を持たなかった［事象］が［起こることが］経験される」）

このように個物とそれの〈種〉、そして属性などの顕現や生起を内属能力による一連の因果関係による出来事と捉えることによって、バルトリハリはこの過程において起こるすべての事象が互いに扶助し扶助される、能力である同時に能力を保持するものであることを示している[19]。

2.4. *VP*3.9.21-23: 個物の存立と〈行為〉実現

*VP*3.9.21-23 において、バルトリハリは既に生起して顕現した個物の存立と〈行為〉実現について述べている。彼によれば、生起して顕現した個物はそれ自身の基体の恒常性とその個物に依拠するものの恒常性によって扶助されて存立する。そして存立しているとき、個物はそれ自身が関係を結んでいる他の事象に扶助されて自分の〈行為〉を実現する。

個物はそれ自身の基体、つまり内属因の恒常性とそれ自身に依拠するものすなわちその個物を内属因とするものの恒常性によって扶助されて存立する。もしその扶助が存在しなければ、個物は結果として実現されるや否や消滅してしまう。

このようなバルトリハリの言葉の背景には、〈時間〉は止まることなく永遠に活動するという、上述した彼自身の思想が存在する。様々な事象の生起だけではなく、存立や抑制、そして消滅にも関与する〈時間〉[20]は、あたかも川の流れが草や葉、つる草などを引きずって別の場所に運び去ることと同様に、その永遠な活動を通じてこの現象世界におけるすべての事象を活動させて、もとの状態から別の状態に変化させる[21]。

個物は自分の〈行為〉実現に関してもそれ自身が関係を結んでいる他者によって扶助される。この場合、個物という他者に内属する〈行為〉の実現を扶助するものであるから個物と関係を結んでいるその他者は〈能成者〉であり、能力である。また個物も、それ自身に内属する〈行為〉を実現するものであるから一つの〈能成者〉であり、能力である。しかし関係を結んでいる他者に扶助されるという点からは、個物は能力保持者である。さらに個物の<行為>実現を扶助する他者も、その扶助を通じて特定の個物に内属する<行為>を扶助するものとして限定的に把握されるという点で能力保持者である。*VP*3.9.21-23 を通じて、バルトリハリは個物の存立と〈行為〉実現も、多様な事象間の扶助関係によって起こる現象であることを意図しているのである。

2.5. *VP*3.9.24-25:老衰能力と個物の消滅

*VP*3.9.24-25 においては、バルトリハリは個物の老衰と消滅の過程について説明する。〈時間〉が有する「老衰」と呼ばれる能力によって、個物の能力が抑制され、今まで起こった現象とは矛盾する現象、つまり生起・存立や〈行為〉実現と矛盾する若さの喪失や知に於ける鈍さ、そしてくたびれることなどの現象が個物に起こる。そしてその個物と関係を結び、ともに〈行為〉を実現していた諸事象と、その個物を存立させていた〈種〉や内属因は能力が抑制された

[19] *VP*3.7.14: nimittabhāvo bhāvānām upakārārtham āśritaḥ / natir āvarjanety evaṃ siddhaḥ sādhanam iṣyate //（「〈扶助〉という目的に依拠して、ものは〈因〉(nimitta) となる。[この場合そのものの]〈因性〉(nimittabhāva) は『傾向性』('nati') とか『性向』('āvarjanā') といったこのような [語によって理解されるところのものである]。それが〈能成者〉であると認められるのはそれがものに確立されてあるときである」) 訳は小川 [2000:551] に従った。

[20] *VP*3.9.10–11: janmābhivyaktiniyamāḥ prayogopanibandhanāḥ / nityādhīnasthititvāc ca sthitir niyamapūrvikā // sthitasyānugrahas tais tair dharmaiḥ saṃsargibhis tataḥ / pratibandhas tirobhāvaḥ prahāṇam iti cātmanaḥ //（「生起と顕現に関する〈制限〉(niyama) は、[〈時間〉による能力の] 使役を根拠とする．そして [事象は] 永遠なる [〈時間〉] に依存して存立するから、[事象の] 存立 [も、〈時間〉による能力の使役を根拠とする]〈制限〉に基づく。存立している [事象] の扶助 (anugraha) はその [〈時間〉] に基づいて、[その存立している事象と] 関係を結んでいるそれぞれの属性によって起こる．さらに、[事象] それ自体の抑制・隠去・消滅 [も、〈時間〉に基づいて、事象それ自体と関係を結んでいるそれぞれの属性によって] 起こる」)

[21] *VP*3.9.41: tṛṇaparṇalatādīni yathā sroto 'nukarṣati / pravartayati kālo 'pi mātrā mātrāvatāṃ tathā //（「川の流れが草・葉・つる草などを引きずって運び去ることと同じように、〈時間〉も要素を有するものの諸要素を活動させる」)

その個物のもとを立ち去る。その結果、その個物の本質は失われる。つまり、その個物は消滅する。

生起から存立までの過程を主管してきた〈時間〉の能力と矛盾する〈時間〉の別の能力、「老衰」と呼ばれる能力によって、個物の能力は抑制されはじめる。そして能力が抑制されることによって、他の事象との扶助関係も抑制されるようになる。その結果、最後に他の事象との扶助関係が成立しなくなり、それによって個物はそれ以上持続できず、消滅してしまう。このようにバルトリハリはこの二つの詩節を通じて、個物の存立と〈行為〉実現を扶助していた諸事象が個物のもとを立ち去ること、言い換えるとそれら諸事象との扶助関係がなくなることによって個物は消滅すると語っている。彼の思想体系においては、扶助せず、扶助されない事象はもはや存在しないものなのである。

2.6. *VP*3.9.26:驚くべき作用による現象としての生起・消滅

これまでの *VP*3.9.16–25 までの 10 詩節において個物の生起と存立、そして消滅までの過程を説明したバルトリハリは、この *VP*3.9.26 において事象の生起と消滅は驚くべき作用を通じて起こることであると述べる。

上述したように、バルトリハリは *VP*3.3.78 において生起する以前の非存在を「そこにおいて原因が地歩を占める余地のない」(apada) ものであると表現している。しかし注意すべき点は、バルトリハリがこの *VP*3.9.26 においては消滅する以前のものつまり存在についても「そこにおいて原因が地歩を占める余地のない」とか「順序を持たない」(niṣkrama) とか「根拠を持たない」(nirnibandhana) というように表現しているということである。我々は次の詩節に注目する必要がある。

*VP*3.9.36: asataś ca kramo nāsti sa hi bhettuṃ na śakyate /
sato 'pi cātmatattvaṃ yat tat tathaivāvatiṣṭhate //

「非存在に関して、順序は［成立し］ない。その［非存在］を区分することはできないからである。また存在に関しても、［存在の］それ自体の本質はまさにそのまま［変化せずに］存立する［から、順序は成立しない］」

この詩節において、バルトリハリは非存在だけではなく、存在に関しても順序は成立しないと述べている。その理由は、存在の本質はそのままの形でいかなる変化もせずに存立するという点にあり、したがって存在に関してはいかなる実質的な変化も起こり得ないからである。もし変化が起こるとするならば、それは存在に、前にはなかった何かが加わるか、或いは以前にはあった何かがなくなるすなわち非存在になることを意味する。しかし存在の本質にそのようなことは起こらない。このように存在にはいかなる実質的変化も起こりえないから、存在に関して順序は成立しない。そして存在に関して変化も順序も成立しないとき、存在に関して順序を相とする＜行為＞は成立しない。ゆえに、存在は生起もしなければ、消滅もしない。また、生起や消滅を目的として原因が存在に対して作用することもあり得ない。なぜならば、原因は扶助することを目的とするものであるが[22]、存在に関して扶助という＜行為＞は成立しないからである。それゆえ、存在に原因が地歩を占めることはない。従って存在であれ、非存在であれ、一切の事象は順序や変化を有しない。そのことをバルトリハリは次のように述べる。

*VP*3.9.46: nirbhāsopagamo yo 'yaṃ kramavān iva dṛśyate /
akramasyāpi viśvasya tat kālasya viceṣṭitam //

「[本質的には] 順序を持たない一切の［事象］のこの顕現の獲得（nirbhāsopagama）は、あたかも順序を有しているかのように経験される。その［順序を持たない一切の［事象］の顕現の獲得があたかも順序を有しているかのように経験される］ことは、〈時間〉の活動［の結果］である」

本質的には順序を持たない一切の事象は、〈時間〉の活動によってあたかも順序を有している

[22]脚注 19 を参照されたい。

かのように経験される。そしてそのことに基づいて、一切の事象に関して「生じる」とか「消滅する」という定動詞表現が可能となる。

順序を持たず、生起や消滅などの変化のための根拠をも持たないものが順序を有し、変化をしているかのように顕われることは、そこに原因が地歩を占める余地のない結果に対して原因の能力による制限が成立することと同様に不思議なこと、合理的に説明することができないことである。原因の能力による結果に対する制限と同様、これも驚くべき作用による現象であると言うほかない。

バルトリハリはこの *VP*3.9.26 と *VP*3.9.17cd 句において、*VP*3.9.16–25 及び *VP*3.9.17ab 句とは明らかに異なる視点から事象の生起と消滅を論じている。彼は *VP*3.9.16–25 及び *VP*3.9.17ab 句においては、世俗的な理解に比較的に近いヴァイシェーシカ学説を援用しながら、現象世界における生起と消滅を多様な事象の間のそれぞれの能力に基づく相互扶助によるものとして説明する。この場合、彼が基づいているのは多様な現象を能力の多様性による展開とみなす能力論である。しかし、*VP*3.9.17cd 句と *VP*3.9.26 においては、バルトリハリは生起・消滅などの変化や多様性を否定し、現象世界における変化する多様な事象は変化することのない単一なる語ブラフマンがそのようなものとして顕われているの過ぎないと述べる。この場合、彼が基づいているのは単一な実在が多様な事象として顕われるという仮現論であり、多様な能力は結局単一な語ブラフマンと異ならないものであるという語ブラフマン一元論である。

3. *VP*3.9.16–26 註釈翻訳研究

以下に *VP*3.9.16–26 に対する *Prakāśa* のテキストと翻訳を提示する。便宜的に *Prakāśa* には科段番号を付している。また注においては可能な限りで関連情報を提示するように努めている。

VP3.9.16

[*VP*3.9.16.0] katham ity atraiva kramam āha /

【質問】いかにして［〈時間〉によって束縛された世界の活動を、その同じ〈時間〉が認容するの］か[23]。【答え】まさにこの［質問］に対して［バルトリハリは〈時間〉によって束縛された世界の活動がその同じ〈時間〉によって認容される］過程を［次のように］述べる。

viśiṣṭakālasaṃbandhāl labdhapākāsu śaktiṣu / kriyābhivyajyate nityā prayogākhyena karmaṇā //

特定の〈時間〉と関係を結ぶことによって能力が成熟するとき、「〈使役〉」と呼ばれる〈行為〉を通じて、［諸原因の中に］恒常な〈行為〉が現われる。

[*VP*3.9.16.1] iha prāṇinām upabhogāya viśvaracanāprapañca iti pralayaparyavasānasamaye 'dṛṣṭavaśāt paramāṇuṣu yathāsvaṃ kāryajanikāḥ śaktayo 'bhimukhībhavanti /

この世界においては、世界の創造を通じた展開は生き物が［それを］享受することを目的として起こる。このゆえに、帰滅に至るまでの時間においては、それぞれ結果を生み出す能力が不可見力（adṛṣṭa）によって諸原子の中に現前する（abhimukhībhavati）[24]。

---

[23] *VP*3.9.16 に先立つ詩節（*VP*3.9.15）において、バルトリハリはひもによって束縛された鳥をその同じひもが解放することと同じように、〈時間〉は自身によって抑制された（pratibaddha）世界の多様な活動を認容する（abhyanujñā）と述べている。従って、*VP*3.9.16 導入部の「いかにして」（katham）という質問は「いかにして〈時間〉によって束縛された世界の活動を、その同じ〈時間〉が認容するのか」という意味である。

*VP*3.9.15: pratibaddhāś ca yās tena citrā viśvasya vṛttayaḥ / tāḥ sa evānujānāti yathā tantuḥ śakuntikāḥ //（「その［〈時間〉］によって抑制された世界の多様な活動を、その同じ［〈時間〉］が認容する。［これは］例えばひもが［そのひもによって束縛された］鳥を［解放することと同じである］」）

[24] 因中無果論を主張するヴァイシェーシカ学派の代表的な概論書である *Praśastapādabhāṣya* の説明によれば、世界の創造の過程は次のようである。

Praśastapādabhāṣya[1984: 48-9]: tataḥ punaḥ prāṇināṃ bhogabhūtaye maheśvarasisṛkṣānantaraṃ sarvātma-

[*VP*3.9.16.2] darśanāntare pradhāne vā mūlakāraṇe kāryonmukhaśaktiṣu ca nityeṣu mūlakāraṇeṣu parasparasaṃśleṣāya prayogaḥ preraṇākhyaḥ karmaviśeṣo jāyate, yena sāmānyabhūtā pravṛttir iti pūrvavyākhyātasatattvā[25] sarvabhāvagatā nityā kriyā prakaṭīkriyate / tathā ca savyāpārāṇi kāraṇāni parasparaṃ saṃyujyante //16//

或は、別の見解［すなわち因中有果論］においては、根本原因である根本原質（pradhāna）の中に、そして結果を生み出そうとする能力を有する恒常な諸根本原因［、つまり五唯（pañcatanmātra）[26]］の中に、［それらを］互いに結合させることを目的とする〈使役〉すなわち「刺激」と呼ばれる特別な〈行為〉が生じる。［そして、］その［〈使役〉という〈行為〉］によって一般的な活動が起こる。このようにして、既に［「〈能成者〉詳解」章、「〈行為〉詳解」章において］その本質が説明された恒常ですべてのものに内在する〈行為〉が顕われる。そしてそのような場合、働きを有する諸原因は互いに結合する。

VP3.9.17

[*VP*3.9.17.0] tataś ca /

そして、その後、

jātiprayuktā tasyāṃ tu phalavyaktiḥ prajāyate / kuto 'py adbhutayā vṛttyā śaktibhiḥ sā niyamyate //

そして、その［恒常な〈行為〉が顕現する］とき、結果である個物が〈種〉に使役されて生じる。その［結果である個物］は、何らかの理由から、驚くべき作用を通じて［原因が有する］能力によって制限される。

[*VP*3.9.17.1] tasyāṃ nityāyāṃ kriyāyām abhivyaktāyāṃ satyāṃ

kāraṇeṣu phalavyaktiḥ kāryavyaktiḥ prajāyate /
svāśrayasyābhiniṣpattyai sā kriyāyāḥ prayojikā //

iti jāteḥ prayojakatvam uktam / niyatajātīyābhisaṃdhānena kāraṇānāṃ vyāpāropapatteḥ jātiḥ prayojakakartrī /

その恒常な〈行為〉が顕現するとき、

「諸原因の中に結果である個物（phalavyakti=kāryavyakti）が生じる。その［〈種〉］は自分の基体の実現のために〈行為〉の使役者となる」

というように、〈種〉が使役者となることが述べられている。諸原因の活動は［その諸原因が］特定の種類に属する［個物の実現］を指向していることによって合理的に説明される。それゆえ、〈種〉は使役者としての〈行為主体〉である。

[*VP*3.9.17.2] sadasatpakṣabhedena darśanadvayasya pūrvaṃ pratyākhyānād āha kuto 'py adbhutayā vṛttyā iti /

atyadbhutā tv iyaṃ vṛttir yad abhāgaṃ yad akramam /
bhāvānāṃ prāgabhūtānām ātmatattvaṃ prakāśate //

ity atra nirṇītam etat / sā ca jātā kāryavyaktiḥ kāraṇaśaktibhir niyamyate yena tatraiva tiṣṭhati / tatsaṃbandhitayā ca vyavahriyate / sadasatpakṣayor api ca kāraṇānāṃ vyāpārasya parākaraṇāt svātmani kāryasya pratiṣṭhāpanaṃ niyamo 'py adbhutāścaryabhūtā vṛttiḥ //17//

因中有果の見解・因中無果の見解の違いに応じて、二つの見解［、つまり因中有果論と因中無果論］は既に否定された。ゆえに、［この詩節においては、バルトリハリは］「［結果である個物は］何らかの理由から、驚くべき作用を通じて［生じる］」と述べる。このことは、

「以前には存在しなかった諸々の事象［すなわち結果としての事象］のそれ自身の本質（ātmatattva）は〈区分〉を持たず、〈順序〉［も］持たないものである．しかし、［そのような］事象のそれ自身の本質は、ある作用が存在するとき［〈区分〉を持ち、〈順序〉を持つものとして］顕われる（prakāśate）。［ブラフマンの能力に帰せられる］その作用は、非常に驚くべきものである」

というこの［詩節すなわち *VP*3.3.81］において既に確定されている。そして、生じたその結果である個物は原因の能力によって制限される。その結果、［結果である個物は］その［原因］にのみ定在する。そして、［原因のみに定在する結果である個物は］その［原因］と関係を結ぶものとして言語表

gatavṛttilabdhādṛṣṭāpekṣebhyas tatsaṃyogebhyaḥ pavanaparamāṇuṣu karmotpattau teṣāṃ parasparasaṃyogebhyo dvyaṇukādiprakrameṇa mahān vāyuḥ samutpanno nabhasi dodhūyamānas tiṣṭhati /（「ついで更に、生類の受用が生じるようにとの願が大自在天にあらわれる。そうすると直ちに、すべての我にある不可見力が活動を始める。そしてその影響によって、かの（我と微塵との）結合が生じ、それによって風の極微に業（働き）が発生する。かくして、極微相互の合から、二微果（dvy-aṇuka, the Diad）等が次第に生じて、粗大な（元素の）風が発生する。そしてそれが揺れ動きながら虚空に存在する」）訳は金倉[1971:117]に従った。

[25]Trivandrum, Raghunātha: pūrvavyākhyātasatattvā; Iyer: pūrvavyākhyātasatatvā; Benares: pūrvavyākhyātatatvā.

[26]因中有果論を奉ずる Sāṃkhya 学派の根本論書の一つである *Sāṃkhyakārikā* によれば、プルシャ（puṛṣa）の享受のために活動をはじめる神々や人間の十三種の器官（karaṇa）は五唯（pañcatanmātra）とその五唯からなる五元素（pañcamahābhūta）を対象とする。このことについては *Sāṃkhyakārikā*31, 33-34 及びそれらに対するヴァーチャスパティミシュラ（Vācaspatimiśra）による註釈 *Tattvakaumudī*を参照されたい。また、山口[1974:212-17]もこのことに関連して詳しい議論を展開している。それら五唯と五元素が根源的には根本原質を原因として生じたものであることはいうまでもない。

現される。しかし、因中有果の見解であれ、因中無果の見解であれ、諸原因の活動は否定されるから、[原因が] 自分自身の中に結果を定在せしめることすなわち [結果を] 制限することもまた驚くべき (adbhuta=āścaryabhūta) 作用である。

VP3.9.18

[*VP*3.9.18.0] anantaraṃ kiṃ bhavatīty āha /

【質問】その直後には何が起こるのか。
【答え】[この質問に対してバルトリハリは次のように] 答える。

tatas tu samavāyākhyā śaktir bhedasya bādhikā /
ekatvam iva tā vyaktīr āpādayati kāraṇaiḥ //

そしてその後、[原因と結果の] 違い [が顕われること] を阻む「内属」と呼ばれる能力によってその [結果である] 個物はあたかも諸原因と同一なものになるかのようである。

[*VP*3.9.18.1] iha tantuṣu paṭa ityādīhapratyayahetuḥ samavāyaḥ pāratantryasāmyāt pūrvaṃ śaktitvena vyavasthāpitaḥ / sa niyamānantaraṃ kāryakāraṇayor bhedaṃ tirodhāpayati / yata ekatvam iva atra bhāsate / tathā ca kecit kāraṇavyatiriktaṃ kāryaṃ necchanti / bhedapratyayaviṣayebhyo 'bhedapratyayaviṣayasyāvayavino 'vayavebhyo vastuto bhedān naikatvam iti ivaśabdaḥ //18//

「この糸の中に布がある」などの「ここに x がある」という観念の原因である内属[27]は依他性という点での類似性 (pāratantryasāmya) から、既に能力として確定されている[28]。その [内属] は [結果が原因の能力によって] 制限された直後、原因と結果の違いを隠す。それゆえ、ここに [原因と結果は] あたかも同一なものであるかのように顕われる。そしてそのような場合、ある人々 [すなわち因中有果論者] は結果を原因と別物として認めない。「同一である」という観念の対象である〈全体〉(avayavin) は「異なる」という観念の対象である諸々の〈部分〉(avayava) とは異なるから、実際には [〈原因〉と〈結果〉は] 同一ではない。ゆえに、「あたかも [諸原因と同一なものになる] かのようである」という (iva) という表現 [が使われている]。

VP3.9.19

[*VP*3.9.19.0] evaṃ pratiṣṭhitāyāṃ kāryavyaktau

このように結果である個物が [原因の中に] 定在するとき、

athāsmān niyamād ūrdhvaṃ jātayo yāḥ prayojikāḥ /
tāḥ sarvā vyaktim āyānti svacche chāyā ivāmbhasi //

そして、この [原因の能力による結果の] 制限の後、[諸原因の] 使役者であるすべての〈種〉は [木などの] 映像が澄んだ水に [水と異ならないものとして映る] ように、[個物の中にあたかも個物と同一なものになったかのように] 顕現する。

[*VP*3.9.19.1] atha iti samuccaye / ūrdhvaśabdenānantaryasyoktatvāt / kāraṇaśaktibhir yadā vyaktiḥ svātmani niyamitā tadanantaraṃ niṣṭhāsaṃbandhayor ekakālatvāt kāryavyaktir jātaiva svajātyā saṃbadhyate prayojikayā /

「そして」(atha) という語は接続 (samuccaya) の意味で [使われている]。なぜならば、「後」(ūrdhvam)

---

[27] *Praśastapādabhāṣya* は内属について次のように説明している。

Praśastapādabhāṣya[1984: 324-5]: ayutasiddhānām ādhāryādhārabhūtānāṃ yaḥ sambandha ihapratyayahetuḥ sa samavāyaḥ / dravyaguṇakarmasāmānyaviśeṣāṇāṃ kāryakāraṇabhūtānām akāryakāraṇabhūtānāṃ vāyutasiddhānām ādhāryādhārabhāvenāvasthitānām ihedam iti buddhir yato bhavati yataś cāsarvagatānām adhigatānyatvānām aviṣvagbhāvaḥ sa samavāyākhyaḥ sambandhaḥ / (「不離が確定し (ayutasiddha) 所持と能持との関係にある物 (ādhārya-ādhāra-bhūta, relation of the container and the contained) の結合について、ここに (それあり) との理解の因となるものが、和合である。即ち、因果としてあり、或いは因果としてない所の、不離の確定した、所持と能持の関係に置かれた実、徳、業、同、異について、「ここにそれがある (iha-idam iti) との意識 (buddhi) が、それから生じ、又、非遍在で異体であると知られた物の非孤立性 (aviṣvagbhāva) が、それによって (明らかにせられる所のもの) これが、和合と称する結合 (sambandha) である」) 訳は金倉 [1971:232] に従った。

[28] *VP*3.3.8–11: nirātmakānām utpattau niyamaḥ kvacid eva yaḥ / tenaivāvyapavargaś ca prāptyabhede sa yatkṛtaḥ // ātmāntarasya yenātmā tadātmevāvadhāryate / yataś caikatvanānātvaṃ tattvaṃ nādhyavasīyate // tāṃ śaktiṃ samavāyākhyāṃ śaktīnām upakāriṇīm / bhedābhedāv atikrāntām anyathaiva vyavasthitām // dharmaṃ sarvapadārthānām atītaḥ sarvalakṣaṇaḥ / anugṛhṇāti saṃbandha iti pūrvebhya āgamaḥ //(「本質を持たないものが生起するとき、『特定の [原因] にのみ [その本質を持たないものは生起する]』という制限がある。そしてその [特定の原因] と [生起するもの] の非分離 (avyapavarga) が起こる。それら [制限と非分離] は関係 (prāpti) であるという点では [〈結合〉(saṃyoga) と] 異ならないけれども、その [内属 (samavāya)] にとって実現される。その [内属] に基づいて、本質 x を有するものについて、それ自体が別の本質 (y) を有しているかのように確定される。そしてその [内属] によって、[内属の関係項間の] 本質は同一であるとも異なるとも決定されない。その『内属』と呼ばれる能力は、[同じ基体に属する他の] 諸能力を扶助するものであり、[基体との] 差異と不異を越え、まったく別様に存立するものである。[そのような『内属』と呼ばれる能力を] 一切の事象の [自主性という] 属性を越え、一切事象によって知らしめられる関係が扶助する。以上のことは先学達によって伝承されていることである」)

という言葉によって直後であることが意図されているからである。[結果である] 個物が原因の能力によって [原因] それ自体に限定されるとき、その直後に、結果である個物は生じるや否や [諸原因の] 〈使役者〉である自己の〈種〉と関係を結ぶ。なぜならば、実現されることと [自己の〈種〉と] 関係を結ぶことは同時に [起こる] ことであるからである。

[*VP*3.9.19.2] niṣṭhottarakālaṃ tu kṣaṇāntare rūpādiguṇopajanād indriyārthasannikarṣāt saṃyuktasamavāyena rūpidravyasamavāyāj jātayaḥ prakāśante / tadyathā nirmale jale vṛkṣādīnāṃ chāyā pratibimbaḥ[29] jalābhedena, evaṃ vyakter aikyātmyam iva prāptā jātayo 'pi gṛhyanta iti dṛṣṭāntasāmyam / sarvāḥ iti sattādravyatvapṛthivītvādayaḥ //19//

一方、[結果が] 実現した次の時間、つまり [結果実現の刹那とは] 別の刹那に色などの属性が生じる。その後、感官と [その] 対象 [である、色などの属性の実体であるところの結果] の接触を通じて [結果である個物に対する知覚が起こる[30]。そしてその場合、感官と] 結合している [実体] への内属によって [〈種〉は] 色 [などの属性] を有する実体へ内属する。〈種〉は [この色などの属性を有する実体への内属を通じて] 顕われる。例えば、汚れのない水に木などの映像 (chāyā=pratibimba) は水と異ならないものとして [映る]。同様に、〈種〉もまた、あたかも個物と同一なものになったかのように把握される。以上のことが、[この] 比喩における類似性である。「すべての」(sarva) という語によっては、有性 (sattā)・実体性 (dravyatva)・地性 (pṛthivītva) など [の〈種〉が意図されている]。

VP3.9.20

[*VP*3.9.20.0] ato 'nantaraṃ guṇānām utpattim āha /

この直後に属性が生じることを [バルトリハリは次のように] 述べる。

kāraṇānuvidhāyitvād atha kāraṇapūrvakāḥ /
guṇās tatropajāyante svajātivyaktihetavaḥ //

[結果は] 原因に随順するものであるから、[生起の順序において] 原因 [である個物] に先行される属性はその後 [すなわち結果である個物が生じた後]、その [自身の内属因である個物] の中に生じる。[生起した] 属性は自己の〈種〉の顕現の原因となる。

[*VP*3.9.20.1] kāraṇānuvidhāyitvena pūrvaṃ kāraṇotpatteḥ paścāt kāryotpattim āha / tenaikasmin kṣaṇe nirguṇaiva kāryavyaktiḥ tato 'vayavaguṇebhyo 'samavāyikāraṇebhyaḥ svāvayavisamavāyikāraṇasahitebhyo[31] 'vayavini rūpādyutpattiḥ / utpannāś ca rūpādayaḥ svajātī rūpatvādikāḥ samabhivyañjayanti /

[結果は] 原因に随順するものであるから、まず原因が生じ、その後結果が生じることを [バルトリハリはこの詩節において] 述べている。それゆえ、一刹那の間結果である個物はまさにいかなる属性をも持たないものとしてある。その後、色などの属性が自身の内属因である〈全体〉と共存する [自身の] 非内属因である〈部分〉の属性によって、〈全体〉の中に生じる。そして、生じた色など [の属性] は色性などの自身の〈種〉を顕現せしめる。

[*VP*3.9.20.2] adṛṣṭavaśāt paramāṇuṣu kriyotpannā pūrvadeśasaṃyogavibhāgavināśapūrvakaṃ parasparopaśleṣeṇa dvyaṇukādiprakrameṇa bhogasādhanān padārthān utpādayatīti piṇḍitārthaḥ / atra sarvatra kramākhyā kālaśaktiḥ savyāpārety abhyanujñeyam //20//

不可見力 (adṛṣṭa) によって諸原子の中に〈行為〉が生じる。その〈行為〉は、[諸原子の] 以前の場所との〈結合〉(saṃyoga) が〈分離〉(vibhāga) によって消滅 (vināśa) した[32]後、[諸原子を] 互いに結合させることによって二微果 (dvyaṇuka) などの順に [生き物の] 享受を実現せしめる諸事象を生ぜしめる。以上が [*VP*3.9.16-20 の] 全体的な内容である。このすべての [過程] において〈順序〉と呼ばれる〈時間〉の能力が働いていると認められるべきである。

---

[29] Trivandrum, Raghunātha, Iyer[P]: cchāyā pratibiṃbaḥ; Iyer: chāyāpratibimbaṃ; Benares: chāyā pratibimbaṃ.

[30] ヴァイシェーシカ学派の見解によれば、大なる量を持つ実体を我々が知覚できるのは、それが多数の実体を内属因としているからであり、また色を有しているからである。つまり、実体は知覚されるために、色という属性を有しなければならない。*Vaiśeṣikasūtra*4.1.6: mahaty anekadravyavattvād rūpāc copalabdhiḥ. Candrānanda's *Vṛtti* ad *Vaiśeṣikasūtra*4.1.6[1961:33]: mahattvaparimāṇasamavāyini dravye samavāyikāraṇadravyabahutvād rūpāc ca śuklāder jñānaṃ bhavati /

[31] Benares, Trivandrum, Raghunātha: svāvayavisamavāyikāraṇasahitebhyo; Iyer: svāvayavisamavāyakāraṇasahitebhyo.

[32] 〈分離〉による〈結合〉の消滅について、*Praśastapādabhāṣya* は次のように説明している。

Praśastapādabhāṣya[1984:141]: vināśas tu sarvasya saṃyogasyaikārthasamavetād vibhāgāt kvacid āśrayavināśād api / katham / yadā tantvoḥ saṃyoge saty anyataratantvārambhake aṃśau karmotpadyate tena karmaṇā aṃśvantarād vibhāgaḥ kriyate vibhāgāc ca tantvārambhakasaṃyogavināśaḥ saṃyogavināśāt tantuvināśas tadvināśe tadāśritasya tantvantarasaṃyogasya vināśa iti // (「これに対して、一切の合の滅は、(合を形造る) 同一物に和合せる離 (vibhāga) から生じ、或場合には所依の滅からも (合の滅が) 生ずる。如何にしてであるか。—それは、二本の糸が合している場合に、何れかの糸の構成部分 (aṃśu) に、(或原因から) 活動 (karman=業) が生ずるとせよ。そうすれば、この活動によって、他の部分からの離が造られる。さらに、この離によって、糸を構成する合の滅が生ずる。合の滅から糸の滅がおこる。糸が滅すれば、糸に依止せる他の糸の合は滅するのである」) 翻訳は金倉 [1971:153] に従った。

VP3.9.21

[*VP*3.9.21.0] kālakṛtā janmaparyāyā bhāvānāṃ vyākhyātāḥ / idānīṃ sthitiṃ vyācaṣṭe /

〈時間〉によって実現される諸事象の生起の過程が説明された。次に、[諸事象の] 存立について [バルトリハリは次のように] 説明する。

āśrayāṇāṃ ca nityatvam āśritānāṃ ca nityatā /
tā vyaktīr anugṛhṇāti sthitis tena prakalpate //

[個物それ自身の] 基体の恒常性と [その個物に] 依拠するものの恒常性がそれら [結果である] 個物 [が存立すること] を扶助する。そのことによって、[結果である個物の] 存立は可能となる。

[*VP*3.9.21.1] yāsāṃ tāvat kāryavyaktīnāṃ nityā āśrayāḥ kāraṇāni tāsāṃ kāraṇavināśapūrvakasya vināśasyābhāvād avasthitatvam / ataś ca paramāṇvādīnāṃ kāraṇānāṃ nityatvaṃ kartṛ tāḥ kāryavyaktīr upakaroti sthāpakatvenāvasthāpanāt / anyathādhāravināśān nāvatiṣṭheran /

まずもって、恒常な基体すなわち原因を持つ結果である個物に関しては [それらの] 原因の消滅に基づく消滅[33]が成立しないから、それら [恒常な基体すなわち原因を持つ結果である個物] は存立する。そしてこのゆえに、原子などの [恒常な] 諸原因の恒常性は〈行為主体〉としてそれら結果である個物を扶助する。なぜならば、[原因の恒常性は] 存立せしめるものとして [結果である個物を] 存立せしめるからである。さもなければ、基体 (ādhāra) の消滅によって [結果である個物は] 存立しなくなるであろう。

[*VP*3.9.21.2] anityāśrayāṇām api kāryavyaktīnām āśritānāṃ jātīnāṃ nityatvād avināśakāraṇam avasthānaṃ svajātibhir evānugṛhyate, tāvantaṃ kālaṃ niyatajātīyatayāvasthānasambhavāt / anyathādheyānāṃ sāmānyānām apāye dravyāṇy avyavahāryatvād asthitakalpāni syuḥ //21//

恒常ではない基体を持つ結果である個物に関しても、[それらに] 依拠する〈種〉が恒常なものであるから、それら [恒常ではない基体を持つ結果である個物] の存立は [それら結果である個物に] 消滅の原因が存在しない限り、[個物] 自身の〈種〉によって扶助される。なぜならば、[それら結果である個物は] その限りの時間において特定の〈種〉に属するものとして存立することができるからである。もしそうでなければ、[それらに] 依拠する〈種〉が消滅するとき、〈実体〉[である個物] は言語表現され得ないことから存立しないも同然なものとなるであろう。

[33] ヴァイシェーシカ学派の見解では、あるものの消滅は、そのものが依拠している基体 (āśraya) の消滅或いはそのものを構成している〈部分〉(avayava) 同士の〈結合〉(saṃyoga) の消滅によって起こる。*Nyāyakandali*[1984:31-2]: sa caiko nārambhakaḥ ekasya nityasya cārambhakatve kāryasya satatotpattiḥ syād apekṣṇīyābhāvāt / avināśitvaṃ ca prasajyate / āśrayavināśasyāvayavavibhāgasya ca vināśahetor abhāvāt / (「しかし、その [原子 (paramāṇu)] が単独で [ものを] 構成することはない。もし単一で恒常な [原子が単独でものを] 構成するとするならば、結果は常に生起してしまう。なぜならば、[この場合には結果を生ぜしめるために一つの原子以外に] 必要とされるべきものはないからである。さらに、[生起した結果が] 滅しなくなってしまう。基体の消滅や〈部分〉の〈分離〉といった消滅の原因が [一つの原因からなる結果には] 存在しないからである」)

VP3.9.22

[*VP*3.9.22.0] itthaṃ cotpattir iva sthitir api parādhīnety āha /

そしてこのように [恒常ではない事象の] 生起 [が他のものに依存するの] と同様に、[恒常ではない事象の] 存立もまた他のものに依存するということを [バルトリハリは次のように] 述べる。

anityasya yathotpāde pāratantryaṃ tathā sthitau /
vināśāyaiva tat sṛṣṭam asvādhīnasthitiṃ viduḥ //

恒常ではない [事象] は、[それ自身の] 生起に関して他者に依存する。それと同様に、[恒常ではない事象は] 存立に関しても他者に依存する。[もし他者に依存しないとすれば、] それはただ消滅するために創造された [ことになるであろう]。[ゆえに、] 人々は [恒常ではない事象は] 他者に依存して存立すると考える。

[*VP*3.9.22.1] kāraṇaṃ vinotpattyabhāvāt yathāsau tatparatantrā tathā kāraṇāvaṣṭambham antareṇa svataḥsthityabhāvāt kṛtakam utpattyanantaram eva pradhvaṃsam iyād iti vināśāyaiva tat sṛṣṭaṃ syāt, nārthakriyārtham ity arthaḥ / tan mā bhūd asyāpārthakaṃ janmeti kāraṇāyattasthitikaṃ tan manyante vaiśeṣikāḥ //22//

原因なしには [恒常ではない事象の] 生起は起こらないから、その [恒常ではない事象の生起] はその [原因] に依存する。それと同様に、原因による支えなしには、[恒常ではない事象が] 自立的に存立することはないから、実現された [事象] はまさに生起して間もなく消滅するであろう。従って、その [実現された事象] は効果的作用 (arthakriyā) [を発揮する] ためではなく、ただ消滅するために生み出されたことになるであろう。以上のような意味である。この [実現された事象] の生起がそのような無益なものであってはならないから、ヴァイシェーシカ学派の人々はその [実現された事象] を原因に依拠して存立するものであると考える。

VP3.9.23

[*VP*3.9.23.0] nanu kramayaugapadyābhyāṃ sthirārthakriyānupapatter ante vināśadarśanāt tatrāpekṣā-

bhāvāt kṛtakaḥ sann ity eva vinaśyatīti sthityabhāva ity āśaṅkyāha /

【反論】恒常なものが効果的作用を継時的に発揮することも、同時的に発揮することも妥当しないから[34]、[そして、事象は] 最終的には消滅することが経験されるから、その [事象の存立] を期待することはできない。それゆえ、実現された [事象] は「ある」と言われるや否や消滅する[35]。従って、[実現された事象の] 存立は成立しない。

【答論】以上のような疑念に対して、[バルトリハリは次のように] 答える。

sthitaḥ saṃsargibhir bhāvaiḥ svakriyāsv anugṛhyate /
naiṣāṃ sattām anudgṛhya vṛttir janmavatāṃ smṛtā //

存立している [事象] は、自分の〈行為〉に関して [自身が] 関係を結んでいる [他の] 事象によって扶助される。伝承によると、これら [存立している事象が関係を結んでいる他の事象] の存在を認めなくては、生起を有する [事象] に関して働きは成立しない。

[*VP*3.9.23.1] saṃsargibhiḥ sahakāribhiḥ anugṛhīto bhāvo 'rthakriyāsu yogyaḥ / na hy ekaṃ kiñcana janakaṃ sāmagrītaḥ kriyāsiddhir ity eṣāṃ saṃsargiṇāṃ sahakāriṇāṃ sattvam asvīkṛtya kārye vṛttiḥ vyāpāro nāsti jātānāṃ bhāvānām /

関係を結んでいる諸共働因 (sahakārin) によって扶助されるとき、事象は効果的作用を発揮することができる。なぜならば、いかなるものも単独では [結果を] 生み出すもの足り得ず、〈行為〉[つまり効果的作用] は原因総体 (sāmagrī) に基づいて実現されるからである。ゆえに、[事象が] 関係を結んでいるこれら諸共働因の存在を認めなくては、生じた事象が結果に対して働くこと (vṛtti=vyāpāra) はない。

[*VP*3.9.23.2] tad evaṃ kramabhāvyanekakārya-kartṛtvaṃ tattatsahakāriprāptau sthitilakṣaṇam upapadyate / tathā ca sthitiparyantābhyanujñopapattiḥ / yat tu sahakāriṇaḥ kiṃ kurvantīti codyate tatra sahakaraṇam eva sahakārārtho [/] 'tiśayāder anyatra vicāritatvād yathāpratīti sthiratvaṃ samarthitaṃ tadvādibhiḥ //23//

かくして、このように、それぞれの共働因を獲得したとき、順々に生じる複数の結果 [を生み出す〈行為〉の] 〈行為主体〉であることが存立の定義として妥当する。そしてそのような場合、[事象の生起から] 存立までは [〈時間〉能力の] 認容 (abhyanujñā) [の活動によるもの] であるということが妥当する。一方、「共働因がどんな働きをなしえよう」と批判するならば、その [批判] に対しては「一緒に働くことこそが〈共働〉の目的である」[と答えるべきである]。[〈共働〉の結果である] 〈卓越性〉(atiśaya) などに関しては既に他のところで[36]考察されているから、[この *VP*3.9.23 においては、事象の] 持続性が、それを主張する論者達に従って，常識通りに確立されている。

VP3.9.24

[*VP*3.9.24.0] idānīṃ pratibandhalakṣaṇāṃ kālavṛttiṃ vyācaṣṭe /

次に抑制と特徴付けられる〈時間〉の働きについて [バルトリハリは次のように] 説明する。

jarākhyā kālaśaktir yā śaktyantaravirodhinī /
sā śaktīḥ pratibadhnāti jāyante ca virodhinaḥ //

[〈時間〉が有する] 他の能力 [すなわち事象の生起と存立を実現せしめる能力] と矛盾する (virodhin) 「老衰」と呼ばれる〈時間〉の能力は、[事象が持

[34] 谷 [2000:111ff.] によれば、恒常なものは効果的作用を発揮し得ないという理由から事象の刹那滅性を確立しようとする論証はダルマキールティ (Dharmakīrti) の *Pramāṇaviniścaya* に初めて登場する。*Pramāṇaviniścaya* II[1973:78]: skad cig ma ma yin pa ni de ltar ma yin te / rnam pa thams cad du mi srid pa'i phyir ro // skad cig ma ma yin pa de ni don byed par srid pa ma yin te / rim dang cig car 'gal ba'i phyir ro // rim gyis ni ma yin te / ltos pa med par rang yod tsam gyis byed pa por gyur pa ni sdod par mi rigs pa'i phyir ro // sngar byed pa po ma yin pa ni phyis kyang mi 'gyur te / rang gi ngo bo 'gyur ba med pa'i phyir ro // ltos pa yin na yang bshad zin to // cig car byed pa yang ma yin te / de'i rang gi ngo bo ni phyis kyang mi byed par mi 'thad pa'i phyir ro // des na nus pa thams cad ldog pa de ni yod pa'i mtshan nyid las 'das pa yin no // (「非瞬間的なものはこのように [必然的に作用する可能性は] ない。どのような方法によっても不可能だからである。非瞬間的なものは [目的を達するための] 効果的作用をなす可能性がない。何故なら、継時的にも同時にも [その作用に] 両立不可能なことがあるからである。[まず、] 継時的に [効果的作用] をなすことができない。[共働原因から] 独立しているとき、それ自身の存在していることのみによって作用することになるが、そのようなものが [その作用の結果を] 遅延することは不合理であるからである。以前に作用する当体でないものは後になっても [作用するもの] となることはできない。何故なら、本質は変化しないからである。[共働原因に] 依存する場合に関してもすでに説明した。同時に作用することもできない。何故なら、その [作用するという] 本質規定は後になっても作用しなくなることが不可能だからである。従って、すべての能力を欠如したそれは、存在の特相から外れてしまうのである」) 訳は谷 [2000:113] に従った。

[35] 或は、別解釈として「作られたもの [について] は「ある」と「消滅する」という [二つの表現] しか [成立し] ない [。すなわち「存立する」は成立しない]」も考えられる。どちらの場合にも、「事象は決して存立しない」ということが意図されている。

[36] *VP*3.7.74-75 と *VP*3.7.93 の二カ所を指していると考えられる。*VP*3.7.74-75 においては目的 (karman) と関連して卓越性が論じられ、*VP*3.7.93 では手段 (karaṇa) との関連から卓越性が論じられている。

つ］諸能力を抑制する。［それによって、〈時間〉が有する他の能力によって実現される結果とは］矛盾する（virodhin）［結果］が［事象に］生じる。

[*VP*3.9.24.1] jīryate bhāvo 'nayeti jarā nāma kālasya śaktiḥ prāṇyaprāṇisādhāraṇayauvanādiśaktyantarapratibandhinī kāryavyaktīnāṃ kālāntaraparivāsāvadhṛtārthakriyāsu sāmarthyaṃ vighnayati / tataś ca sāmarthyavirodhino 'vasthāviśeṣāḥ prāṇyaprāṇiṣu prajñāmāndyaśoṣādayaḥ prādurbhavanti / yataḥ pradhvaṃsaḥ pratyāsanna iti lakṣyate //24//

「それによって事象が老衰化されるところのもの」と［語源分析される］「老衰［の原因］」と呼ばれる〈時間〉の能力は、いのちを持つもの・いのちを持たないものに共通する若さなどの別の能力を抑制するものであるから、結果である個物が有する、別の時間を住処として［発揮することが］確定されている効果的作用に対する能力［が実現されるの］を阻む。そしてその結果、知における鈍さや乾燥化などという、能力とは反対の特殊な状態がいのちを持つもの・いのちを持たないものに顕われる。消滅はその［老衰］から近いと理解される。

VP3.9.25

[*VP*3.9.25.0] evaṃ jarasādhiṣṭhite bhāve

このように事象が老衰によって支配されるとき、

prayojakās tu ye bhāvāḥ sthitibhāgasya hetavaḥ /
tirobhavanti te sarve yata ātmā prahīyate //

しかし、［関係を結んでいる事象の］使役者であり、［その事象の］存立という部分の原因である事象すべてはなくなる。その結果、［それらと関係を結んでいた事象の］本質は失われる。

[*VP*3.9.25.1] yaiḥ[37] pravartitāḥ svakārye bhāvāḥ saṃsargibhiḥ sahakāribhiḥ sthityaṃśahetavaḥ te sarve 'sya jarādhiṣṭhitasya kṛtadhnā iva sahoṣitā api nivartante / teṣu nivṛtteṣu kṛtakaraṇīyasyāsya bhāvasya svarūpaṃ pracyavate //25//

［それ自身と］関係を結んでいる諸共働因によって、事象は自分［によって実現されるべき］結果に向けて活動を始める。この［事象］の存立という部分の原因であるそれらすべての［共働因］は、［この事象と］ともに過ごしていたにもかかわらず、この［事象］が老衰によって支配されるとき、恩知らずの［人が友達のもとを立ち去る］ようになくなる。それら［共働因］がなくなるとき、実現されるべきものを既に実現したこの事象の本質は失われる。

[37] Benares, Raghunātha, F[4], F[20](= Iyer[E^2]): yaiḥ; Iyer, Trivandrum: yaiḥ (ye?).

VP3.9.26

[*VP*3.9.26.0] na tu vināśakāraṇair asya kiñcit kriyata ity āha /

しかし、［真実には］消滅の原因はこの［事象］に対していかなる［作用］も為さない、ということを［バルトリハリは次のように］述べる。

yathaivādbhutayā vṛttyā niṣkramaṃ nirnibandhanam /
apadaṃ jāyate sarvaṃ tathāsyātmā prahīyate //

順序を持たず、［生起の］根拠も持たない、［そしてそこに原因が］地歩を占める余地のない［、或はそれを表現する言葉が存在しない］一切［の事象］は、驚くべき作用を通じて生じる。それと同様に、この［一切の事象］の本質は驚くべき作用を通じて失われる。

[*VP*3.9.26.1] janmani sadasatpakṣabhedena pūrvaṃ kāraṇavyāpārasya vyudāsād avibhāvitatattvam avidyamānakāraṇabhūtanibandhanam ata eva kāraṇavyāpārābhāvāt paurvāparyeṇāṃśāṃśikayāniṣpatter akramaṃ viśvam ājāyamānam upalakṣyata iti pūrvam eva vivartacintāyāṃ nirṇītam etat /

生起に関しては、既に因中有果の見解・因中無果の見解の違いに応じて原因の働きが否定された。それゆえ、一切［の事象］は生じるとき、次のようなものと見なされる。すなわち、［それは］1) 未だそれの本質が顕われておらず、［それの生起の］原因である根拠が存在しないものである。2) まさにこのゆえに、［それに対する］原因の働きが［成立し］ないものである。3) それゆえ、順に［まず］部分として、［その後］全体として生起することのないものである。4) ゆえに順序を持たないものである。このことは、まさに既に〈仮現〉（vivarta）について考察したときに[38]確定された。

[*VP*3.9.26.2] evaṃ vināśe 'pi / kriyamāṇatāyāṃ bhāvatāpatter nirnibandhanam eva prahāṇaṃ kālaparivāsādhīnaṃ bhāvānām ity arthaḥ / tad evaṃ sargasthitipralayānāṃ kālakṛtapratibandhābhyanujñāvaśena sambhava iti viśvātmanaḥ kālasya vyāpāro 'tra sarvatreti nirṇītam / tad uktam pratyavasthaṃ tu kālasya vyāpāro 'tra vyavasthitaḥ iti //26//

消滅に関しても同じである。もし［消滅が原因によって］実現されるとするならば、［消滅は］存在になってしまう。それゆえ、まさに根拠を持たないものである事象の消滅は〈時間〉という住処に依拠するものである、という意味である。かくして、以上のように創造・存立・消滅は〈時間〉によって実現される抑制と認容［といった活動］によって起こるから、宇宙の魂である〈時間〉の働きはこれらすべてにおいて存在すると確定された。そのことは［*VP*3.9.12ab において］次のように述べられている。

[38]『〈関係〉詳解』章（Sambandhasamuddeśa）の後半部、特に *VP*3.3.77-81 を指していると考えられる。

「そして、この［存立などの状態］において、〈時間〉の活動は一つ一つの状態ごとに確立されている」[39]

略号および参考文献

略号

Benares Benares edition of *Vākyapadīya*. See Śāstrī, G. Dāmodara[1930].
Nyāyakandali. See Dvivedin[1984].
Prakīrṇaprakāśa. See Iyer[1963], [1973].
Pramānaviniścaya II. See Steinkellner[1973].
Praśastapādabhāṣya. See Dvivedin[1984].
Trivandrum Trivandrum edition of *Vākyapadīya*. See Śāstrī, K. Sāmbhaśiva[1935].
Vaiśeṣikasūtra. See Jambuvijayaji[1961].
VP Bhartṛhari's *Vākyapadīya*. See Rau[1977].

参考文献

Dvivedin, V. Prasad

1984 *Praśastapāda Bhāṣya with Commentary Nyāyakandali of Śrīdhara*, 2nd ed. Sri Satguru Publications (Sri Garib Dass Oriental Series 13).

Halbfass, Wilhelm.

1993 *On Being and What There Is: Classical Vaiśeṣika and the History of Indian Ontology*. First Indian ed. Sri Satguru Publications (Sri Garib Dass Oriental Series 168).

Iyer, K. A. Subramania

1963 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentary of Helārāja, Kāṇḍa III, Part I*, Poona: Deccan College (Deccan College Monograph Series 21).

1966 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentaries Vṛtti and the Paddhati of Vṛṣabhadeva, Kāṇḍa I*, Poona: Deccan College (Deccan College Monograph Series 32).

1969 *Bhartṛhari. A Study of the Vākyapadīya in the Light of the Ancient Commentaries*. Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute (Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series 68).

1973 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Prakīrṇaprakāśa of Helārāja, Kāṇḍa III, Part II*, Poona.

Jambuvijayaji, Muni

1961 *Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda*, Baroda: Oriental Institute (Gaekward's Oriental Series No.136).

Nārāyaṇamiśra, Śrī

1969 *Vaiśeṣikasūtropaskara of Śrīśaṅkaramiśra with The 'Prakāśikā' Hindi Commentary*, 2nd ed. Varanasi: The Chowkhamba Sanskrit Series Office (The Kashi Sanskrit Series 195).

Ogawa, Hideyo

1999 "Bhartṛhari on śakti: the the Vaiśeṣika Categories as *Śakti*". *Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)* 47–2: 1003–1010.

2000 "Bhartṛhari on *pravṛtti* as the First *kāraka*". *On the Understanding of Other Cultures (Studia Indologiczne)* 1: 343–368.

forthcoming "On Bhartṛhari's notion of 'power' (*śakti*)". (Appearing in the proceedings of the Second International Conference on Bhartṛhari).

Raghunātha Śarmā (Sharmā)

1974 *Vākyapadīyam Part III (Pada Kāṇḍa) (Jāti, Dravya and Saṃbandha Samuddeśa)* with the Commentary *Prakāśa* by Helārāja and *Ambākartrī* by Pt. Raghunātha Śarmā. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University (Sarasvatībhavana-Granthamālā Vol. 91). Second edition: 1991.

1979 *Vākyapadīyam Part III , Vol. II (Pada Kāṇḍa) (Bhūyodravya, Guṇa, Dik, Kriyā, Kāla, Puruṣa, Saṃkhyā, Upagraha, and Liṅga Samuddeśa)* with the Commentary *Prakāśa* by Helārāja and *Ambākartrī* by Pt. Raghunātha Śarmā. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University (Sarasvatībhavana-Granthamālā Vol. 91). Second edition: 1997.

Rau, Wilhelm.

1971 *Die Handschriftliche Überlieferung des Vākyapadīya und Seiner Kommentare*. München: Wilhelm Fink Verlag (Abhandlungen der Marburger Gelehrten Gesellschaft Jahrgang 1971, Nr. 1).

1977 *Bhartṛharis Vākyapadīya. Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes 42, 4).

2002 *Bhartṛharis Vākyapadīya. Versuch einer vollständigen deutschen Übersetzung nach der kritischen Edition der Mūla-Kārikās*, hrsg. von Oskar von Hinüber. Stuttgart: Franz Steiner Verlag (Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften und der Literatur 8).

Śāstrī, K. Sāmbhaśiva

1935 *The Vākyapadīya (3rd Kāṇḍa) With The commentary Prakīrṇaprakāśa of Helārāja son of Bhūtirāja*. Part I. Trivandrum: Government Press (Trivandrum Sanskrit Series No.CXVI).

Śāstrī, G. Dāmodara

1930 *Vākyapadīya, A Treatise On The Philosophy of Sanskrit Grammar by Bahrtṛhari, With a Commentary by Helārāja*. Vol. II, Fasciculus V. Benares: Vidya Vilas Press (Benares Sanskrit Series No.161).

Schayer, Stanislaw.

1938 *Contribution to the Problem of Time in Indian Philosophy*. Krakow.

Steinkellner, Ernst

1973 *Dharnakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ. Zweites Kapitel: Svārthānumānam. Teil I: Tibetischer Text und Sanskrittexte*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften (Veröffentlichungen der Kommissin für Sprachen und Kulturen Südasiens 12).

小川英世

2000「バルトリハリの〈能成者〉論」(『インドの文化と論理』pp.533–584) 九州大学出版部

2002 インド古典文法学研究（広島大学学位請求論文）

金倉圓照

1971『インドの自然哲学』平楽寺書店

[39] *VP*3.9.12: pratyavasthaṃ tu kālasya vyāpāro 'tra vyavasthitaḥ / kāla eva hi viśvātmā vyāpāra iti kathyate // (「そして、この［〈存立〉などの状態］において、〈時間〉の活動は一つ一つの状態ごとに確立されている。実に、〈時間〉そのものが宇宙の魂である。［それは］『活動』と呼ばれる」)

谷貞志
2000 『刹那滅の研究』春秋社
山口恵照
1974 『サーキヤ哲学体系の展開』あぽろん社

(イ　ジェヒョン，広島大学大学院
文学研究科博士課程後期［インド哲学］)